

vol. 105

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

ccma_jp ccma_jp

【編集・発行】千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区
中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba
260-0013, Japan <https://www.ccma-net.jp/>
【発行日】2022年10月25日
【印刷】株式会社 エイチケイ グラフィックス

C'n
scene
news

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 105号



しおたにまみこ 《たまごのはなし》2020年 (BIB 2021金牌) 作家蔵 ©しおたにまみこ



イ・ミョンエ 《明日は晴れるでしょう》2017年 (BIB 2021金のりんご賞) 作家蔵 ©Lee Myung Ae

館長のつれづれコレクション案内 「!」「?」から始まる元永定正の世界



元永定正 「作品」 1962-3 (昭和37-38)年 油性樹脂系絵具・
カンヴァス 130.3×193.9cm

「絵の具をたくさん水で溶いて紙の上に流した。紙の角度によって流れかたが変わる。別の色を溶いてその上に流した。流れるときは色と色とが混ざり合って複雑に変化する。流す場所や角度や水や絵の具の量を変えると無限に形や色が変わるのがおもしろい。

流れることは引力と時間などが関係しているわけだけれど乾いてしまってもそのまま流れた形が残って流れた時間を感じさせる。色と色とが混ざりあ

ったり離れたり思いがけない世界が出現したりして人間生活のドラマとも重なるように思ってしまう。」(註1)

これは、この欄で紹介する「作品」を制作した元永定正 (1922-2011) が、2006年に自身が絵を担当した絵本『いろいきてる!』の原画について記した文章ですが、40年以上前に制作した「作品」のことを語っているようにも読めます。「作品」はカンヴァスをいろいろな角度に

傾けて絵具を流したり、絵具を含ませた筆や刷毛を画面に向けて振って絵具を撥ねさせたりして不思議なかたちと複雑な色を創っています。元永は「色が大好き」と言い、同じ色でも色面のかたちや周囲の色によって違う表情になるのが面白いと語っており、その作品には色への深い興味がこじみ出しています。

1922(大正11)年に三重県阿山郡(現:伊賀市)に生まれた元永は、1938年に上野商業学校を卒業して大阪に出、機械工具店の住み込み店員となって働くうち、漫画を雑誌に投稿するようになります。戦後は郵便局員ほか様々な職に就きつつ、1948(昭和23)年第1回三重県美術展覧会に出品し奨励賞を受けるなど、画家として頭角を現していきました。1955(昭和30)年に具体美術協会を主宰する吉原治良と出会い、「見たことがないものをつくる」ことを提唱する吉原に啓発されて同協会に参加。抽象画に移行し、日本で古くから行われていた「たらし込み」の技法を参考として、「作品」にみられるような制作を始めます。欧米でも特定のかたちを表さないアンフォルメルと呼ばれる絵画が登場していた時期で、元永はフランスやイタリアの画廊と契約するなど海外での評価も得、1966(昭和41)年には国際交流基金の招へいにより渡米します。アメリカでは適した絵具

が手に入らなかったこともあり、絵具を流す制作は行わず、翌年に帰国してからも、明快なかたちと色によるユーモアあふれる作品を制作しました。1971(昭和46)年2月に吉原治良が死去すると、間もなく具体美術協会を退会。以後は、活動の幅を広げ、1973(昭和48)年にThe Pwoaan-Hwaan Cloud Family(文:らくだこぶに、絵:元永定正)を刊行して以後、絵本作家としても評価を得ていきます。

絵本づくりでも元永は「見たことがないものをつくる」姿勢を貫き、物語を絵で表すだけでなく、色やかたちに「もこもこ」といったオノマトペや「もけら もけら」といった特定の意味を持たない言葉を含ませて、子供も大人も楽しめる新しい絵本の世界を拓きました。凝り固まった常識を疑うことから新しい可能性が拓ける、そのきっかけには驚きが大切、と元永は思っていたようです。忍者の里、伊賀出身の元永は自らの制作と忍術を結びつけ、「忍術の場合は完全に意表でなければ術が破れるし、新しい芸術の場合は意表であると同時に美でなければならぬ。(略)えい、えい、どろんぱ、新しい絵が生まれた」(註2)と記しています。「作品」もそうした一点。「!」「?」と思われたら、元永との出会いは始まっています。

[館長 山梨絵美子]

註1 「こどものとも」600号 『いろいきてる』折込ふろく『絵本のたのしみ』 p.1 (2006年3月、福音館書店)
註2 元永定正『忍術と新しい芸術』『現代の眼』77 p.7 (1961年4月、東京国立近代美術館)

ブラチスラバ 世界絵本原画展

絵本でひらくアジアの扉—日本と韓国のいま

スロバキア共和国の首都・ブラチスラバで2年ごとに開催される、世界最大規模の絵本原画コンクール「ブラチスラバ世界絵本原画展」。今回の国内巡回展では、アジア諸国の絵本を入りに、日本と韓国の絵本を特集します。「C'n」vol.103の「美術館の仕事をご紹介します!」のコーナーでは、展覧会に向けた韓国での調査についてレポートしました。今回は、韓国のノミネート作品を中心に、担当学芸員と広報担当で、韓国絵本について語る座談会を開催。韓国絵本の魅力はどこにあるのでしょうか? 展覧会とあわせてお楽しみください。

磯野(広報担当) まず、どんなところが韓国絵本のおもしろさなのでしょう。

庄子(担当学芸員) わたし自身、具体的にはよくわかっていませんでした。勢いがあるという事は聞いていたんですが、ノミネート作品が決定し、絵本を手配し、届いたものを見てはじめて実感しましたね。うわ、これはすごい、と。

山根(担当学芸員) テーブルの上に全部並べてみて。本当におどろきましたね。

庄子 造本から印象的で。装丁が凝っているものや、判型が変わっているものが多く、とにかく楽しい。イラストレーションも、どれも軽やかさと華やかさを併せ持っていて、とても目を惹きました。

磯野 ノミネート作品は、どういった経緯で選ばれているのでしょうか。

庄子 韓国では、KBBY(韓国国際児童図書評議会)がセレクトしています。ラインナップの背景には、KBBYの戦略があるのではないかと思います。韓国へ調査に行った際に、KBBYの方とも話したのですが、「新しい挑戦を試みている絵本を選んでいる」とおっしゃっていました。

山根 韓国が押し出していきたいイメージの一端が表れているのかもしれませんがね。国際コン



1 韓国のノミネート作品。14人の作家による14タイトルがノミネートしました。

ペの場で、韓国の絵本ってすごくおしゃれですてき、と思ってもらうことを意図している部分もあるのだと思います。

磯野 デザインがきれいですね。

庄子 そうなんです。デザイン性がとても高く、おしゃれなんですよ。

磯野 そのあたりは、日本と比べて大人も絵本を読むところの方が大きいのでしょうか。子どもだけがターゲットではないことが、造本にも表れているというか。

庄子 そうですね。韓国では、大人も絵本を読むと聞きます。韓国において創作絵本が誕生したのが1980年代後半で、当時は、大人も子どもも同時に絵本に出会いました。絵本というものが、良い意味で「子どものもの」ではないんだと思います。

山根 この造り、子どもだったら、壊してしまったり、なくしてしまったりしそうですね。

磯野 日本の絵本は、壊れにくいように作られていて、頑丈な本というイメージがあります。

庄子 日本にも、凝った装丁の絵本はたくさんありますが、広く流通はしていないですよ。小さな出版社や、個人の独立出版で、ささやかに作られている印象です。一方で、韓国では、ノミネート作品にも複雑な造本の作品があがってきている。

磯野 造本によって、値段が高いとかは……?

庄子 そんなに高くないと思います。韓国では、書籍に消費税がかからないので、たとえば『すくいゆき』は19,000ウォン、1,900円ちょっとです。

磯野 ちなみに日本だと?

山根 1,500円あたりが相場でしょうか。でも、そこに消費税が足されるわけですから、税金はとて大きいですよ。韓国では、国策として、



2 オ・セナ『黒うさぎ』Dalgrimm, 2020年刊
函入りの絵本。函はうさぎのかたちに取り付けられています。

広く本が手に取れるようにしている。

庄子 ノミネート作品には、文字のないサイレントブックも多く含まれています。

山根 イラストレーションで勝負しているわけですね。文字があったとしても、少ない傾向にあるかもしれません。

庄子 韓国国内だけでは市場の規模が小さいので、はじめから海外での翻訳出版を視野に入れて制作しているという話も聞きました。そのため、翻訳がしやすい、あるいはする必要のないように、文字の少ない絵本やサイレントブックが多いようです。

山根 けれど、どの絵本も、ストーリーがないわけではないんですよ。

庄子 物語に力を入れている作品もあります。ハン・ピョンホさんの『母の島』は、イラストレーションとテキストを別の作家が手がけています。版元のポリム出版社を取材した際、近年はとくに物語の重要性を感じていると聞きました。絵は絵、文は文で、それぞれ優れた作家に依頼し、かけあわせる『母の島』も、編集者の采配で、理想のタッグが組めたそうです。

磯野 いままでは、イラストレーターが自分でテキストも書いていたということですよ。

山根 創作絵本が生まれてから、イラストレーターや作家、編集者、出版社などがいっせいに絵本づくりに取り組むことで、韓国における絵本が発展してきたわけですが、ここにきて「物語」というところに立ち返っているのかもしれないですね。

庄子 韓国で創作絵本が誕生した1980年代後半は、表現媒体も多岐にわたり、印刷技術も発達し、さまざまなものの質が、ある程度水準まで到達していたと思うんです。そのような環境のなかで絵本が生まれたわけですから、きっとすべてが同時進行だったんでしょうね。あれもできる、これもできる、というような。



3 パク・ヒョンミン『すくいゆき』Dalgrimm, 2020年刊
表紙に家のかたちの穴が開いています。

山根 そして、その発展とともに、読者もいっしょに育っているのだと思います。

磯野 今回、絵本は手に取れるんですか? 前回は、感染症の影響で断念しましたが……。

庄子 その予定で準備しています。

磯野 ぜひ手に取って読んでみてほしい。韓国の絵本はありますか?

庄子 函入りの絵本や、表紙に穴が開いている絵本があるのは、韓国だけです。凝った造本を、実際に手に取って楽しんでいただけます。イラストレーションでいうと、デジタル処理をほどこした原画が多いので、日本ほど原画と絵本の違った良さを感じられる機会は少ないかもしれませんが。韓国の作品は、良い意味で絵本と原画のどちらのほうがいいということがないんです。

磯野 原画の段階で絵本の完成形に近づけてつくっていて、ギャップが小さいですね。

庄子 一冊挙げるなら、『母の島』でしょうか。表紙に使われている船のイラストレーションが、本当にすてきなんです。原画の支持体には、韓紙が使われています。少しだけ厚い紙で、韓国の伝統的な紙です。

山根 わたしは『夏』が好きですね。「暑さ」の表現がなんとも言えないです。すごく感覚に訴えかけてくるんですが、だからといって描写がリアルなわけではない。色づかいも魅力的で、力のあるイラストレーションです。

庄子 日本と韓国では、あきらかに作品の雰囲気や趣が違いますが、展示をご覧になっていただければ一瞬でわかると思います。

山根 韓国絵本は、日本ではまだまだ手に取れる機会は少ないと思います。モノとしての魅力が溢れる絵本ばかりなので、ぜひ会場でお楽しみください。

[収録日: 9月26日/話し手: 山根佳奈(主任学芸員)、庄子真汀(学芸員)、磯野愛(広報)]



4 ハン・ピョンホ『母の島』Borim Press, 2020年刊



5 イ・ソヨン『夏』Gloyeon, 2020年刊

ブラチスラバ世界絵本原画展
絵本でひらくアジアの扉—日本と韓国のいま

会期 11月12日[土] - 12月25日[日]

会場 8・7階 企画展示室

休館日 12月5日[月]

休室日 11月21日[月]

詳細はホームページよりご覧ください





2022年7月13日～10月2日 「つくりかけラボ08 堀 由樹子|えのぐの森」レポート

えのぐの森が生き茂った夏



緑が生き茂る季節、夏。子どもアトリエに、「えのぐの森」が現れました。約3ヶ月にわたって開催された、画家・堀由樹子さんによるプロジェクトをレポートします。 [撮影:加藤健]



「えのぐの森」は、堀さんが描いた木々や枝、つるから始まりました。壁面に絵の具で描かれた森の断片に、来場者のみなさんが「はっぱ」を飾り、どんどん森を茂らせていきます。



撮影:美術館



「はっぱ」は、クレヨンや色鉛筆、色のついた紙の切れ端を使ってつくっていきます。まっさらな紙にゼロから描いたり、線画に色を塗ってみたり、紙の切れ端をコラージュしてみたり。たくさんの人の参加によって、「えのぐの森」は、あっという間に色あざやかに茂ってゆきました。



撮影:美術館



会期中に開催されたワークショップでは、絵の具やクレヨンを使って「はっぱ」のもとになる紙をつったり、森に棲む生きものを透明シートに描いたりしました。これらも「えのぐの森」をつくる要素になり、生きもののすがたも増えていきました。

会期の後半では、緑のカーテンや大きな木の幹が登場。「はっぱ」や生きものは壁面を飛び出し、空間全体に広がっていきました。また、照明の色味によって、時間帯を変化させる演出も。夜明け前や日の出、夕暮れなど、時間によって表情を変える「えのぐの森」を楽しむことができました。



長い期間を経て、「えのぐの森」は、あふれんばかりに茂ってゆきました。会期の終盤では、「はっぱ狩り」と題して、お気に入りのはっぱを持ち帰るイベントも開催しました。夏が過ぎ、季節は秋。「えのぐの森」も、葉を落とし、新たな芽吹きをのたくをする時間です。

つくりかけラボ08

堀 由樹子 | えのぐの森 (終了)

会 期 2022年7月13日[水]-10月2日[日]

会 場 4階 子どもアトリエ



2022年10月13日(木)～12月25日(日)「つくりかけラボ09 大小島真木|コレスポンドランス/Correspondances」

自然と人間について、みて、聞いて、また作って

第9弾となる「つくりかけラボ」は、国内外で活躍する現代美術作家の大小島真木さんをお招きします。担当スタッフに、プロジェクトについて聞きました。

つくりかけラボは今回で9回目、作家は大小島真木さんです。大小島さん、いろいろやることを企んでいるようです。なにを描くかだけにとどまりません。壁だけではなくて床に描く。土から陶芸をして、来てくれるひとに陶芸するところをみてもらいたい。来てくれたひとと手

紙のやりとりをする。本を置いてゆっくり読んでもらう。コンピューターを使い、映像や音を流す……。そんなことを話しながら、今はそれが実現できるように動いているところです。

そして今回こだわっているのが、6人の「ゲスト」をお招きして開かれるトークパフォーマンス。語り部を担う専門家たちは、「山」や「糞」など人間以外の「ゲスト」になりきって、その「ゲスト」の思いを代弁します。彼らは私たちにどんなことを語りかけてくるのでしょうか。そし

てその「ゲスト」の言葉から、大小島さんはなにをあらわし、私たちはなにを考えていくのでしょうか。トークと大小島さんの思いが溶け合っただけでプロジェクトが作り上げられる過程を、どうやら目撃することになりそうです。

大小島さんは、自然や人間について深くものごとをとらえる力があります。自然や人間を深く知ること、それを自分の肥料として、作品を作る力につながっています。みなさんは今の自然や人間、そして自分自身について、どう思

いますか。食物連鎖、地球環境、生と死、人と動物、人と自然。今私たちが考えなければならない壮大な問題から目を背けず、しっかりと広く正面から立ち向かっていく。そんな大小島さんの姿や作品を実際に目にすると、一人一人が深く考え、溶け出したなにかを持ち帰ることができるかもしれません。

[嘱託学芸員:樽谷孝子]



制作風景 photo by Chiga Kenji



《朧衣 Ena》(部分)2022年 画像提供:セゾン現代美術館 撮影:加藤健



《言葉としての洞窟壁画と、鯨が酸素に生まれ変わる物語》2019年 瀬戸内国際芸術祭(粟島) Projected by 大小島真木 + ワルリ三兄弟 + 粟島鯨チーム 撮影:山田富士夫

〈トークパフォーマンス スケジュール〉

日程	ゲスト	語り部
10月16日[日]	「山」	石倉敏明(人類学者・神話学者)
10月23日[日]	「猿」	足立薫(霊長類社会学者)
10月29日[土]	「粘菌」	唐澤太輔(南方熊楠研究者)
11月5日[土]	「珊瑚」	アゴスティーニ・シルバン(海洋生物学者)
11月13日[日]	「糞」	伊沢正名(糞土師)
12月23日[金]	「身体」	北村明子(振付家・ダンサー)

※詳細はホームページでご確認ください。

つくりかけラボ09

大小島真木 | コレスポンドランス/Correspondances

会 期 2022年10月13日[木]-12月25日[日]

会 場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料





びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.6
出品作品が載った絵本を読んでみよう!



「ブラチスラバ世界絵本原画展」に出品されている、日本代表作家による原画が載った絵本を一挙にご紹介! 原画はもちろん、絵本というかたちもひとつの完成形です。びじゅつライブラリーでは全作品をご用意しています。ゆっくりじっくり読みたいときは、ぜひブラリへ! 原画も絵本も、どちらもお楽しみください。

「びじゅつライブラリー」は、千葉市美術館 4階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、幅広くご紹介しています。広々とした空間で、美術と本をお楽しみください。



© KARAPPO

あべ弘士 『うみどりの島』



北海道にある小さな島・天売島^{てうりとう}の1年間を、島にやってくる海鳥とともに描いた絵本。天売島には、毎年100万匹もの海鳥がやってきます。さまざまな種類の海鳥がダイナミックに描かれ、広大な自然のなかをのびのびと羽ばたいています。
文：寺沢孝毅、偕成社、2019年刊

荒井真紀 『まどのむこうのくだものなにあ?』



黒一色のページに開いた穴からは、くだもの表面が見えます。まどのむこうのくだものなにあ? ページをめくると、まるで本物のようなくだものが、さらにページをめくると、断面まで。馴染みのあるくだものを、新しい目線で楽しめる一冊。
福音館書店、2020年刊

荒井良二 『こどもたちはまってる』



こどもたちは、いったいなにを「まってる」のでしょうか。ページをめくるたびに、やわらかな黄色に包まれたあたたかい風景が広がっています。そのなかに、ぼつんと小さく描かれた子どもたち。ふねを、ロバを、あめを、ゆきを、こどもたちはまってる。
亜紀書房、2020年刊

飯野和好 『かふんとみつ』



つんつんでんつんつんでん。春は、南のほうからやって来る。花の精は三味線を奏でながら歌をうたい、ふたりの少女は花の蜜をちゅーっと吸い上げる。リズムのある言葉とともに、春爛漫を描いた祝祭的な絵本。
絵本塾出版、2020年刊

飯野和好 『火 あやかし』



山道を歩く兄弟は、行く先に燃え上がる炎を見ます。近づいてみると焚き火のあとが。喜んで休憩をしていると、そこにとつぜん……。我に返ったふたりの青い表情。遠くで揺れる赤い炎。水彩絵の具の色の重なりが、妖しい世界へと導きます。
小峰書店、2019年刊

うえだまこと 『りすとかえるとかぜのうた』



森で暮らすりすとかえる。ある日、りすは、かえるといっしょに旅に出ようとふねを漕いで出かけます。そこに大きな風が吹いて……。森の水辺や、あたりを包み込む大きな風が、水彩絵の具でみずみずしく描かれる一冊。
BL出版、2020年刊

きくちちき 『おひさまわらった』



原画と絵本を見比べてみてください。色あいがかまったく違うことに気がつきませんか? 原画をそのまま印刷するのではなく、違った色をあてがってつくったのが絵本です。自然やおひさまのあたたかさが、木版画の質感からじんわりと伝わってきます。
JULA出版局、2021年刊

しおたにまみこ 『たまごのはなし』



表紙から目を惹きふてほしいたまご。顔も、手も足も、なんだかとてもリアル。キッチンの片隅で目を覚ましたたまごは、マシュマロといっしょに家のなかを歩き回ります。ユーモアたっぷりのたまごのおはなしが痛快な、BIB 2021金牌受賞作。
ブロンズ新社、2021年刊

スズキコージ 『チンチラカと大男』



物語は、ジョージアに伝わる昔話。王様の命令で悪い大男から宝物を盗んだチンチラカが、最後には王様も大男もやっつけて自らが王様になります。なんといっても見どころは大男。強烈な色彩と構図で、目が離せないほどの迫力です。
文：片山ふえ、BL出版、2019年刊

田島征三 『つかまえた』



ページを開くと、真っ先に独特の絵の具の筆あとが目にとまります。使われている絵の具は、泥絵の具に水性ポンドを混ぜた特製のもの。作家が少年時代に川で魚をつかまえたときの思い出が、絵本のなかにそのまま立ち上がっているかのようです。
偕成社、2020年刊

たじまゆきひこ 『せきれい丸』



淡路島と明石を結ぶ連絡船「せきれい丸」。ひろしが乗った船は、波にのまれて沈没してしまいます。とある理由で命が助かったひろしは、漁師を目指し、生きる力を取り戻していきます。
文：田島征彦・木戸内福美、くもん出版、2020年刊

館野鴻 『がろあむし』



積み重なった岩のなかで暮らす昆虫・ガロアムシの一生を描いた絵本。緻密に描かれたガロアムシの暮らしは、わたしたちの知らない生命の循環を教えてください。作家は、約10年ものあいだ取材と観察を続け、この絵本をつくりあげました。
偕成社、2020年刊

中野真典 『ミツ』



タイトルの「ミツ」は、作家が実際に飼っていた猫の名前です。しかし、ミツは、もうこの世界にはいません。ある春の日、最後の散歩から息を引き取るまでを描いたこの絵本では、「ぼく」とミツの最期があたたかく描かれています。
佼成出版社、2019年刊

降矢なな 『どうぶつABCえほん』



ドア(Door)の前でドーナツ(Donuts)を食べる恐竜(Dinosaur)、かまくら(Igloo)でアイロン(Iron)をかけるイグアナ(Iguana)。ユーモアあふれる動物たちのイラストレーションは細部まで見どころたっぷり。楽しくアルファベットを覚えよう!
文：安江リエ、のら書店、2019年刊

降矢なな 『ヴォドニークの水の館』



「ヴォドニーク」とは、チェコ周辺地域で語り継がれる水の主。川へ身を投げようとした娘は、ヴォドニークに救われ水の館で働くことになります。けれど、だんだんと娘の気持ちは変化していき……。生と死、希望と絶望を描いた、幻想的な一冊。
文：まきあつこ、BL出版、2021年刊

松本大洋 『こんとん』



白くてもふもふの大きな体、6本の足、6枚の翼、ちょろりとしたしっぽ。それが「こんとん」のすがた。「こんとん」には、目も耳も鼻も口もありません。しかしある日、「こんとん」に二つの目、二つの耳、二つの鼻、一つの口の七つの「穴」を与えることになり……。
文：夢枕獯、偕成社、2019年刊

ミロコマチコ 『ドクルジン』



「ドクルジン」は、海、山、生きものを口に放り込み、どんどん大きくなります。「なんて きもちが いいんだ ちからが どんどん あふれてきたぞ」。プリミティブでサイケデリックなイラストレーションが爆発する、作家の新境地の一冊。
亜紀書房、2019年刊

出品作家による選書企画

「あのとき読んだ、あの本がvol.2」開催!

「ブラチスラバ世界絵本原画展」の会期中、びじゅつライブラリーにて、出品作家による選書企画を実施します。「子どものころから学生のころに読んだ本のうち、いまでも影響を受けている本」をテーマに、11名の作家から選書とコメントをいただきました。本から伝わる作家のルーツや背景を、どうぞお楽しみください。
会期 2022年11月12日(土)～12月28日(水)
会場 4階 びじゅつライブラリー
休室日 第1月曜日